宮古諸島における遺跡出土の屋瓦

沖縄国際大学 総合文化学部 助教授　上　原　　静

1、はじめに

宮古諸島の屋瓦に関する調査・研究は、文献史学と考古学から行われている。前者の研究は郷土史における窯産業の開始と展開に関心がもたれ、他方、後者の研究は出土資料の造瓦時期を対象に注目されている。しかし、いずれも資料の解説もしくは観察の所見留まりで、体系的に取り組まれてないのが現状である。無論この遅滞の大きな理由は両学とも資料の僅少にあり、その点では現在も大きな変わりないが、小稿では考古学資料の僅少と出土状況を積極的に宮古諸島の特性として捉え、現段階における屋瓦及び関連資料を整理し私見を述べたい。

2、調査研究略史

冒頭で記したように宮古諸島の瓦に関する調査・研究は、歴史学と考古学の領域から行われている。以下に分けて研究状況を概観する。

1) 歴史学的研究

歴史学的研究では郷土史家の稲村賢敷（註 1) と慶世村恒任（註 2) の考証がある。慶世村は著書『宮古史伝』で、1728（雍正 6) 年宮金氏平良親雲上寛富が壷類焼試方下知方に任ぜられたことで、その焼成法及び造瓦焼成法を修得し、以降瓦葺きが宮古社会へ普及したと、その起源と展開について説いた。一方、前者の稲村は宮古諸島における造瓦技術の受容時期を二段階で捉え考察している。一段階は原史遺跡の城辺町砂川元島遺跡に窯跡が存在することを前提に、隣接の上比屋山遺跡に散布する平板な土器類を屋根瓦と同質の機能を有する塼類と解する。そして、その製作技術の源流を中国もしくは日本を考え、先の慶世村の見解よりさらに古く開始期を遡らせ理解した。二段階は前代の製作技術は後に継承されず毀滅に帰したと解し、瓦の再登場を 1685（康熙 24) 年、宮古蔵元の焼失のため、御物蔵、船手蔵、仕上蔵が瓦葺きに改修された時点を挙げている。ただ、これを生産段階とはせず、1740（乾隆 5) 年に平良頭職宮金氏寛富が大野山造林を行い、瓦を焼いたとする点をもって、宮古の生産開始期であろうと論じた。このように稲村は積極的に考古資料を援用して瓦の使用時期や製作時期を考察した。しかし、現時点では稲村が根拠とする城辺町砂川元島遺跡の窯跡は確認されず、また、上比屋山遺跡における平板な塼瓦も宮古式土器の広底部片の可能性が高く、一段階における瓦の存在を証明することが困難である。

表 1 に宮古諸島における屋瓦及び窯業に関する年表として、まとめたが、現段階は 1611（万暦 39) 年、祥雲寺が瓦葺（『御嶽由来記』）（註 3) となる文献記録によって、17 世紀の初頭段階を宮古産の可能性は少ないにしても屋瓦使用の上限とみなされる。

表1　宮古諸島における屋瓦及び窯業に関する年表

1611（万暦 39）年	宮古祥雲寺、陶瓦をもって屋根を葺く。
1685（康熙 24）年	宮古蔵元焼失のため、御物蔵、船手蔵、仕上蔵の三座を瓦葺きに新築する。
1728（雍正　6）年	平良親雲上宮金氏寛富が瓦壷類の焼き方を伝授。
1740（乾隆　5）年	平良頭職宮金氏寛富が大武山で瓦を焼く。

2）考古学的研究

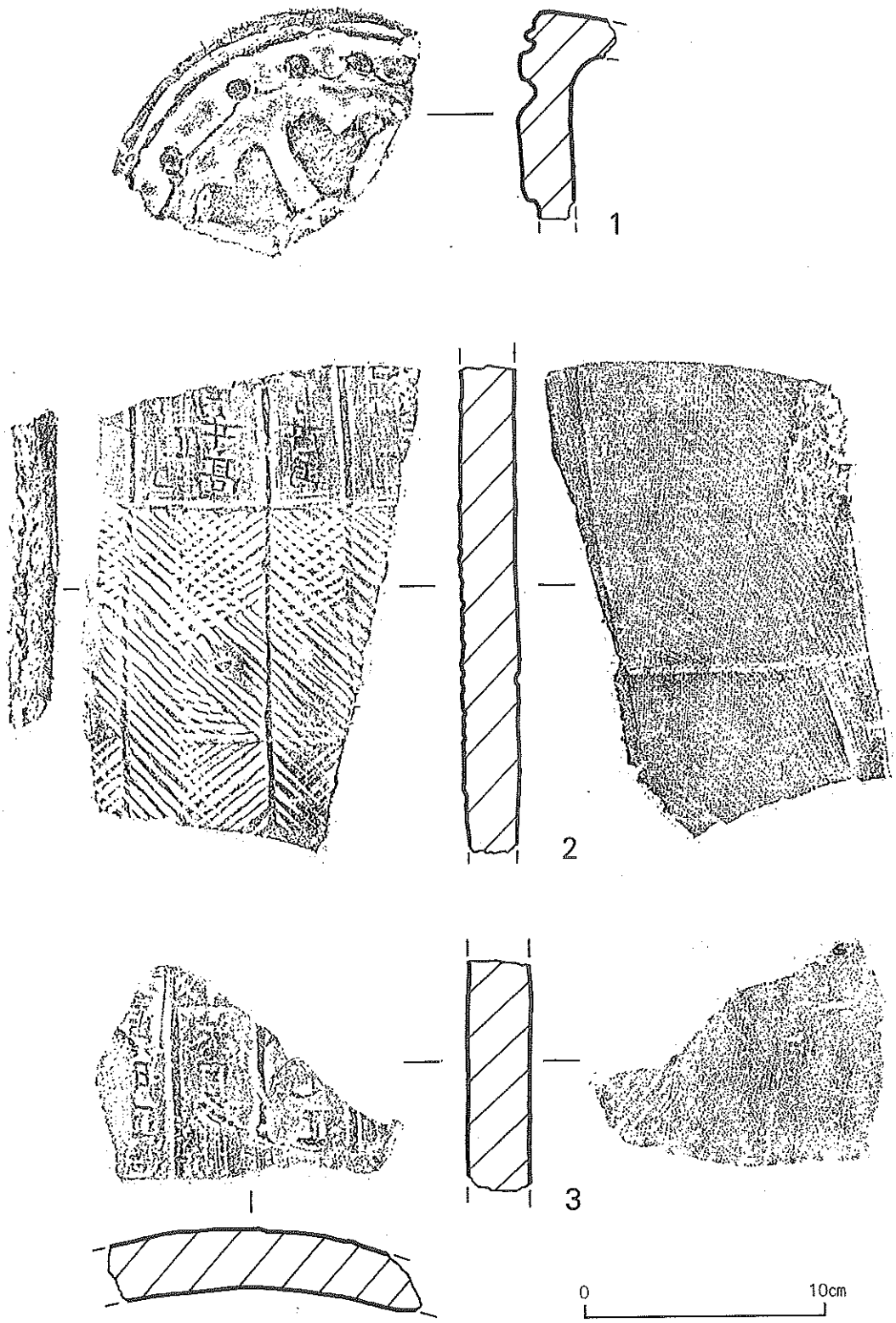
考古学的研究の開始は 1989 年の砂川元島遺跡発掘調査からである。明朝系瓦の丸瓦と平瓦が報告され、ことに平瓦の凸面にみる曲線文様について、宮古式土器の肩部に施される波状文様との類似性が指摘され、島産である可能性が考察された（註 4）。その後の発掘調査では軒平瓦が出土し、資料の追加が行われている（註 5）。1976 年に関口広次は、上ヌ頂遺跡出土瓦と砂川元島遺跡出土瓦が同種の資料で、砂川元島遺跡における整地層の出土状況が、明和八年大津波（1771 年）以前の整地層出土を根拠に 18 世紀には赤色系瓦が生産されたことを推定した。また、同瓦が地域の集会場とよばれているところに散布する点から、公的建造物にのみ 18 世紀の宮古島では葺瓦建築が存在していたと考察した。（註 6）本報告以降、暫く宮古諸島において瓦が記載された調査、研究書はみられなくなる。

再び出土瓦が学会に登場するのは 2000 年、平良市内の開発に伴う埋蔵文化財試掘調査からである。当遺跡は平良市内に所在する根間・西里遺跡で、『沖縄監獄製』と刻印された黒色瓦が新聞で紹介された。同報道では平良市教育委員会の見解として、監獄における囚人の福利厚生を目的として製造されたものであろうとしている（註 7）。続く 2003 年には、同市内に所在する尻並遺跡の緊急発掘調査が行われ、多数の近現代の陶磁器類に伴い酸化焼成炎の明朝系瓦や、近代大和瓦の影響を受けた瓦が報告されている（註 8）。時代の新旧を問わず出土事実の記録を徹底しており、今後資料の蓄積に期待したい。

以上、文献史学と考古学による調査・研究をふり返ったが、現段階として①宮古島における屋瓦の使用は、文献記録に基づくと 17 世紀初頭まで遡り、自らの生産は 18 世紀前半からとなる。②造瓦技術は明朝系赤色瓦で軒瓦、平瓦、丸瓦であり、紛れもなく本瓦葺建物が存在している。今後は、③ 17 世紀初頭から 18 世紀前半段階における灰色瓦と赤色瓦の展開の事情、④その後の造瓦技術の変遷、⑤瓦生産地（窯）と消費地との関係等について明らかにする必要があろう。

表2　宮古諸島における瓦出土遺跡一覧表

番号	遺　跡	所在地	時　代	種　類	参考文献
1.	上比屋山遺跡	城辺町	中　世	高麗系瓦	（註　9）
2.	砂川元島遺跡	城辺町	近　世	明朝系瓦	（註 10）
3.	上ヌ頂遺跡	平良市	近　世	明朝系瓦	（註 11）
4.	根間・西里遺跡	平良市	中、近世	大和瓦･明朝系瓦	（註 12）
5.	尻並遺跡	平良市	近現代	大和系瓦、明朝系瓦	（註 13）
6.	住屋遺跡	平良市	中、近世	大和瓦･明朝系瓦	（註 14）
7.	漲水御嶽	平良市	近現代	明朝系瓦	（註 15）
8.	池間島ナナムイ御嶽	池間島	近現代	明朝系瓦	（註 16）



第１図　高麗瓦系　　1、2・上比屋山遺跡　3・具志川城跡（久米島町）　平良市総合博物館蔵

3、出土遺跡と瓦の状況

ここでは宮古諸島の瓦資料と出土遺跡について概観する。表２に宮古諸島における瓦出土遺跡一覧としてまとめた。

1) 上比屋山遺跡

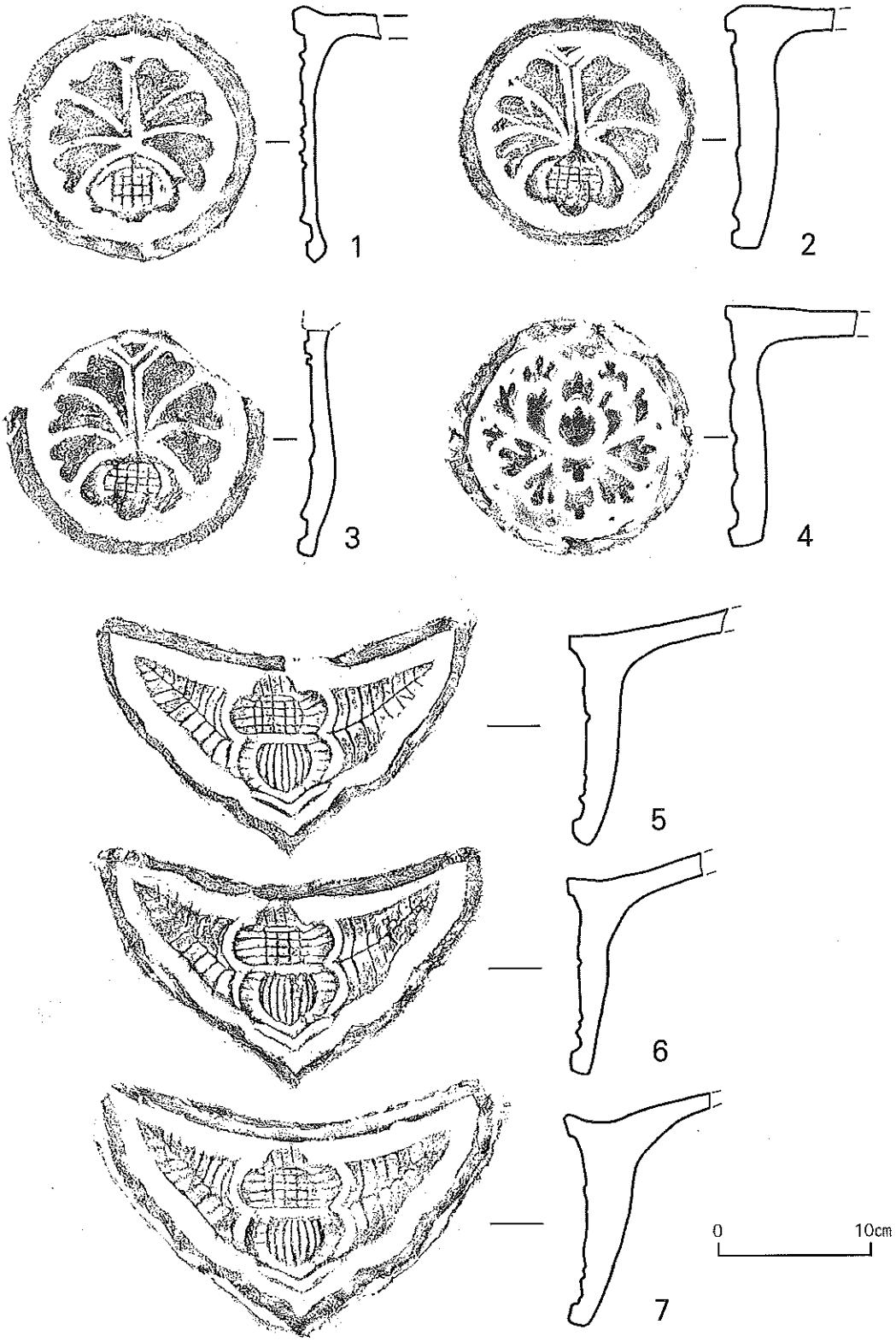
出土遺跡は城辺町砂川集落の南方、標高約 40m の丘陵上に所在するグスク時代の集落遺跡である。資料は第１図１、２で、紛れもない高麗系瓦である。現宮古平良市博物館に所蔵される故稲村賢譜の寄贈資料で、上比屋遺跡以外に、久米島の具志川城跡出土とするものもあり、寄贈時には各別々に遺跡名が記された紙袋に入っていたようである。なお、瓦そのものには注記はない。当上比屋山遺跡はこれまで多く調査機関や関係者により踏査が行われているが、中世瓦の出土はこれをもって初例とする。２点の資料はいずれも以下の点で興味深い。図１は還元焼成炎の灰色を呈する軒丸瓦の瓦当破片である。連弁文様はＹ字形で、その外周に線でつながる珠文を配している。現在のところ類例は沖縄本島の浦添城跡（註 17）のみで、沖縄島においても極めて少ない軒丸瓦である。

図２も凸面に「癸酉年高麗瓦匠造」銘が明瞭に残る平瓦破片である。凹面は布目圧痕と糸切り痕が鮮明にみられ、側面には分割破口面が残る。凹面の糸の数を１cm 四方の内でみると、縦横が 13 × 13 本である。還元焼成炎の灰色を呈し、厚さが約 1.7cm である。「癸酉年」銘のある平瓦も、沖縄本島においての発掘出土遺跡においても量的には少ないものであり、また器面にみられる石灰分の付着状況も前資料と同じく、浦添城跡において採集される瓦類の器面状況に酷似しているところが気にかかる（註 18)。同氏の倭寇研究の一環で調査した上比屋山遺跡や具志川城跡の遺物採集資料リスト（註 19）には、陶磁器類の出土記載はあるが、重要な高麗瓦にはふれてない点も留意される。沖縄本島における浦添城跡の採集瓦が、何らかの事情で上記２遺跡出土となったのではないかと推測され、上記出土地については疑問を有する。

図３は上記でふれた久米島具志川城跡出土とされる高麗系平瓦の破片である。ここで合わせて紹介しておきたい。細片ではあるが、刻銘部分がみられる。色調は灰色。厚さ２㎝。裏面には布目と糸切り痕がみられる。布目の糸は縦 17 本、横 14 本を数える。現在史跡整備事業に伴う大々的な発掘調査が実施されているが、現在でも高麗系瓦の発見はなく、この資料はその意味でも貴重な資料である。

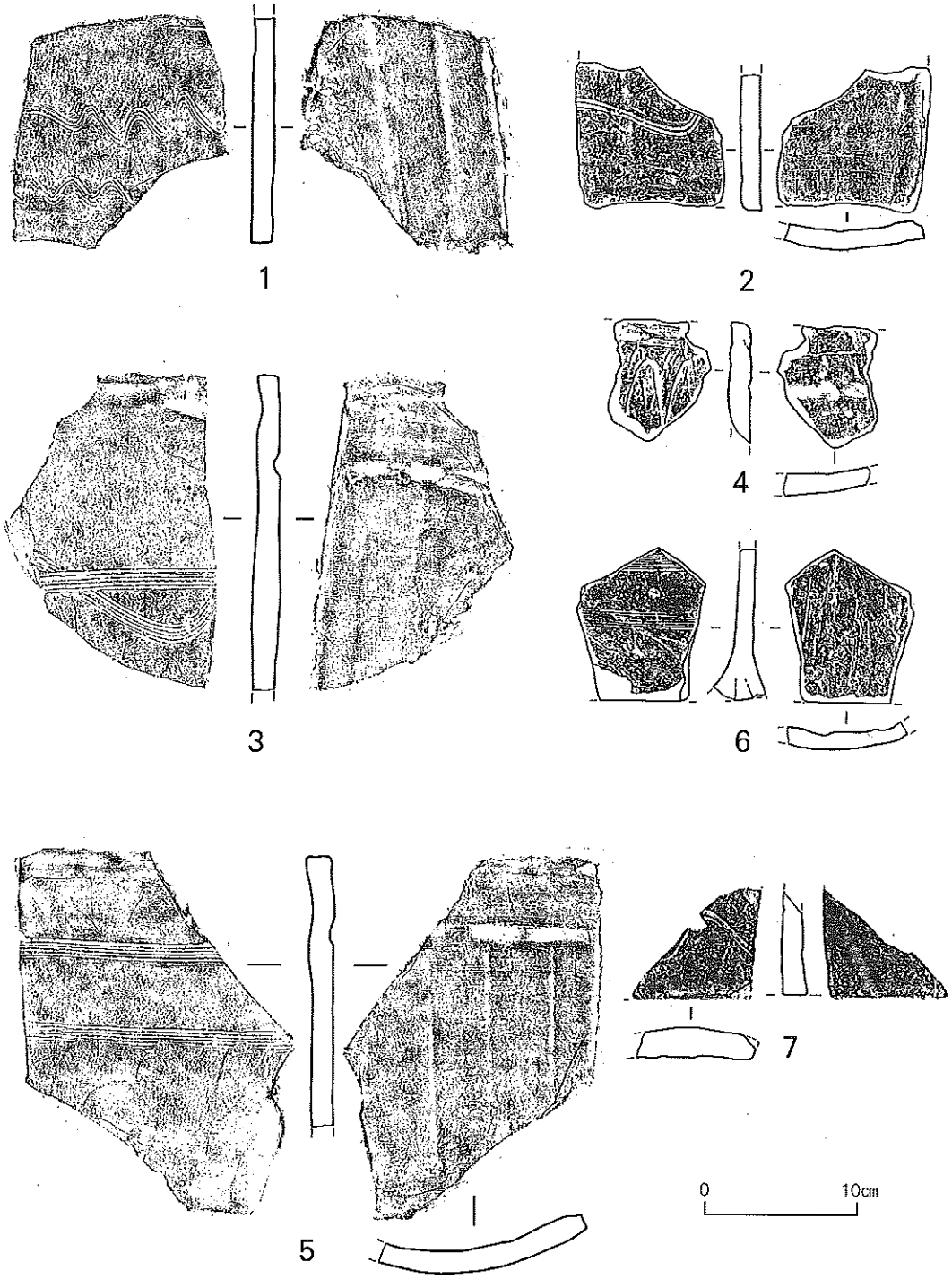
2) 砂川元島遺跡

本遺跡は 1974、75 年に青山学院大学砂川元島調査団が発掘調査を行い、また、1986 年に城辺町教育委員会が緊急発掘調査を実施している。14~16 世紀のグスク時代と琉球王府時代の 17 世紀にわたる重複遺跡である。伝承では現砂川集落の祖先が住み、1771（明和 8）年の大津波によって壊滅されたと伝えている。当委員会の調査では出土瓦はすべて表土層から得られるとし、地点によって堆積が異なることを示唆している。その種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の４種で、素地は砂川遺跡分類の土器Ⅲ類に近いという。丸・平とも凹面には布目痕をもち、平瓦の凸面部には波状文様が施されている（第３図 7)。文



第２図　軒丸瓦　1、2、4・住屋遺跡／3・池間島ナナムイ御嶽　　**軒平瓦**　5～7・住屋遺跡

様手法、焼成、胎土などから宮古島産であることを考察した（註 20)。なお、報告されている軒平瓦は破片であるが、瓦当文様の花芯の中心部には刻目文様がみられ、瓦当面形が

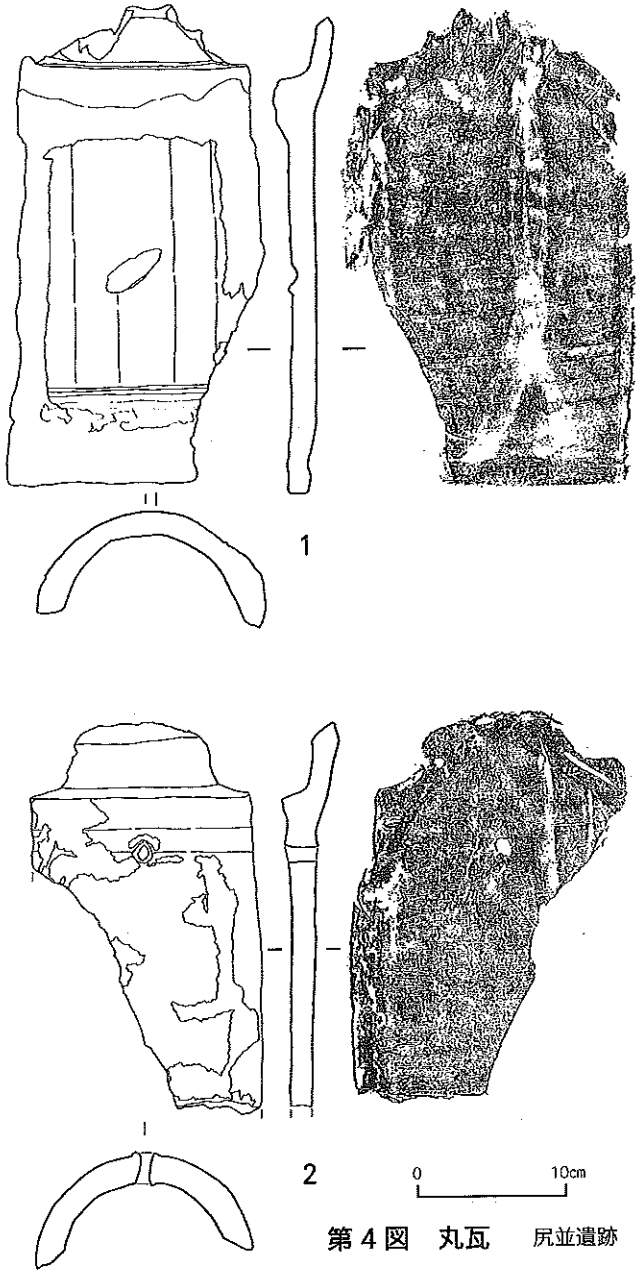


第3図　平瓦　1、3、5・住屋遺跡　／　2、4、6・尻並遺跡　／　7・砂川元島遺跡

垂尖形である。また、軒丸瓦の瓦当文も側視型の花文様である。前者が沖縄本島明朝系瓦当文様の第Ⅲ 09 文様、後者が第Ⅲ 02 文様に類似し、その系譜をたどることができる（註21)。焼成技術は酸化炎焼成の赤褐色ないし淡褐色を帯びる。

3) 上ヌ頂遺跡

平良市街の北側にある石灰岩丘に形成されている。1969 年に友寄英一郎・嵩元政秀によって発掘されたグスク相当期から近世までの遺跡である。発掘調査により２系統の在地土器を始めて明らかにし、その土器にＡ、Ｂ式の名前を与え、Ａ→Ｂの編年を試案した。ことにＢ式は轆轤が使用され、波状文をもつことに着目し壷屋陶器の影響を指摘した（註 22)。関口広次は同遺跡出土の軒丸瓦、軒平瓦を図で紹介している。いずれも細片であるが、第２図に示した軒平瓦、軒丸瓦の瓦当文様と同種のものがみえる。



第４図　丸瓦　尻並遺跡

4) 尻並遺跡

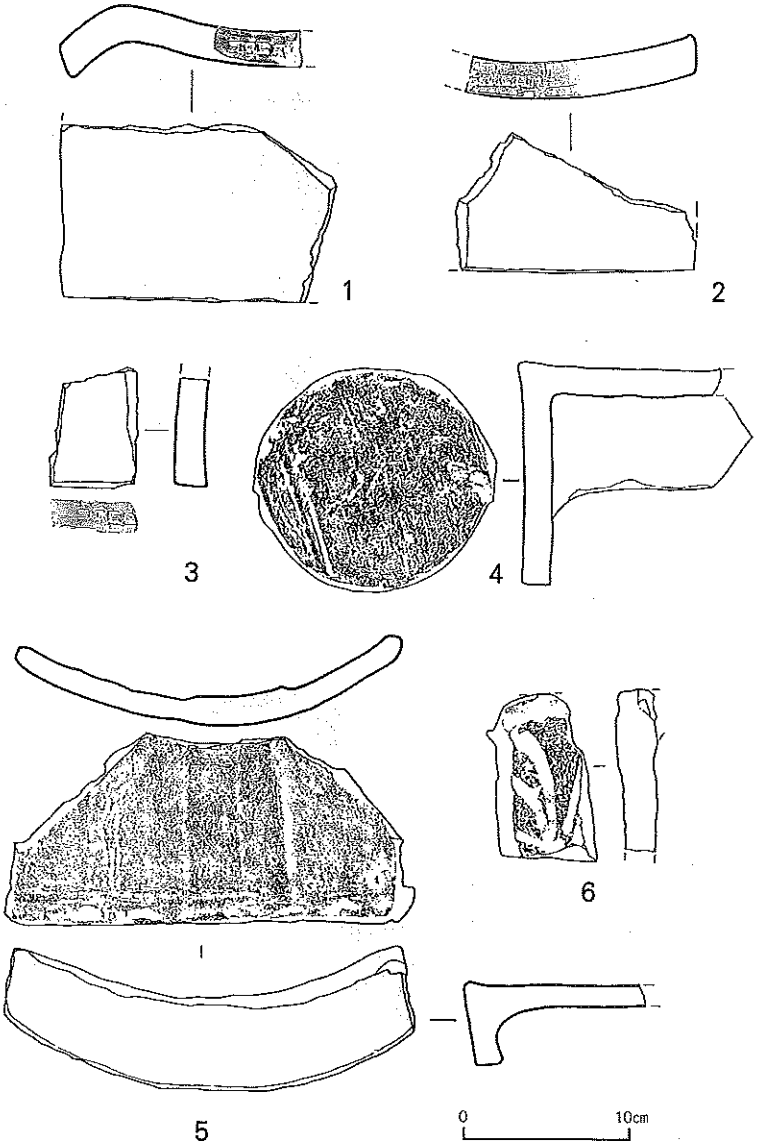
平良市字西里に所在する近世、近代の遺跡である。1911（明治 32) 年に那覇地方裁判所平良支部が当該地に建設され、その後も建て替えがあり堆積層が撹乱されているという（註 23)。出土資料は２系統の瓦が認められる。１つは明朝系の軒平瓦、丸瓦、平瓦で軒丸瓦は得られてない。軒平瓦は瓦当面が逆三角形で、住屋遺跡の第２図５～７等と類似する文様が施文されている。平瓦は第３図 2、4、6 で、いずれも凸面端部側に線掻きが行われている。この線掻きも巨視的には２種類に分けられる。ａ類は波状文様で、ｂ類は直線文かもしくは波状文様を組み合わせたものである。丸瓦は第４図 1、2 で、模骨造りの玉縁式丸瓦である。凸面には漆喰の付着があり、

凹面には布目が明瞭に残る。2は筒部中央に小孔と側縁部の面取り整形から、瓦当部が欠落した丸瓦の可能性が高い。

2つ目の瓦は、第5図4～6の大和瓦を模した島赤瓦である。瓦当面の形態や丸瓦との接合角度などは明らかに近代大和瓦の影響を受けている。4は無文瓦当の軒丸瓦で、筒部側面は面取りされ平滑である。瓦当径約13㎝、丸瓦との接合角度はほぼ90度である。5は瓦当面が幅の狭い長方形を弧状にした軒平瓦で、瓦当面はやはり無文である。瓦当面には横位の調整によるナデ痕がみられる。平瓦の凹面には明確に明朝系平瓦との接合をみせ、また漆喰の付着が認められる。焼成が赤色を呈する。6は文様のある軒瓦である。これら瓦類にはいずれも漆喰の使用が確認される。

5) 根間・西里遺跡

平良市字西里に分布する遺跡で、試掘調査時に14世紀代の陶磁器類やタイの半練土器など中世、近代に属する資料ともに瓦が出土している（註24)。第5図1～3は近代大和瓦製作技術で作成された桟瓦破片である。焼成は還元焼成の灰色瓦で、表面の整形は極めて丁寧で光沢もみられる。胎土面はややチョコレート色味を帯びる。厚さ1.6～2.0㎝をはかる。なおいずれも端部に「沖縄監獄製」と5文字の刻印を確認することができる。第6図は実物大の刻印である。1～3はに示すように左側から右側へ記す。沖縄の刑務所は1879年に沖縄県監獄署として設置されたのが始まり。以後、1903年に沖縄監獄、1922年に沖縄刑務所と



第5図　近代大和瓦等（桟瓦）1～3　4～6　尻並遺跡

改称された経緯がある。なお、1899年以降は平良分監も設置された。このことから製作が第二次世界大戦前であることが推定される。

1

2

3

4

0　5 cm

第6図　刻印瓦
1～3 根間・西里遺跡　4 住屋遺跡

6) 住屋遺跡

平良市字西里に存する中世から近代に至る遺跡である（註25）。1629年この地に在番仮屋が建設され、1879年の廃藩置県までの250年間、宮古統治の拠点となった。本遺跡からは明朝系瓦と近代大和瓦の2系統の瓦が出土している。前者の明朝系瓦は灰色瓦と赤色瓦に細分される。灰色瓦は平瓦のみである。厚さ1.0～1.5cmの薄手で、凸面は撫で整形で無文で、凹面は布目がみられる。器面の風化が進んでいる。後者の赤色瓦は最も出土量が多く、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の4種類を得た。軒丸瓦は第2図1、2、4の3点で、瓦当には牡丹文様が施されている。珠文はみられない。瓦当径は約14～16㎝である。瓦当面と丸瓦面が約90度になる。軒平瓦は同図5～7である。瓦当中央の花は上下に分かれ、両側には葉脈の明瞭な葉が配されている。瓦当面と丸瓦の接合角度が100～107度と傾斜する。平瓦は第3図1、3、5で、凸面の線掻きでは1がa類、3、5がb類にあたる。a類は幅が0.6～0.7㎝で、櫛目数が2、3本の波状沈線であり、b類は幅が1.1～1.3㎝で、櫛目数が5、6本の直線構成の沈線か、もしくは波状沈線を組み合わせのもである。二つ目の瓦は近代大和瓦で平瓦、棟瓦が出土している。燻し銀色で器面は極めて丁寧な整形が行われている。平瓦の凸面には櫛掻きが行われている。雲形の棟隅飾瓦は破片資料で、縁部分に第6図4の草書で記す「寿」文字様の印が確認された。大きさが径1.4㎝である（註26）。

7) 漲水御嶽

本御嶽は漲水港に所在する堅固な石積み囲のある御嶽である。創建年代は不明であるが、1500年に仲宗根豊見親玄雅が戦勝を祈願した記録がみえることから、少なくとも当段階には存在している（註27）。1685年の蔵元の瓦葺き替えを考慮すると、当年以降として判断される。現在同御嶽に葺かれている明朝系軒丸瓦、軒平瓦は明らかに当初からのものではないが、先に紹介した住屋遺跡の第2図4と同種のものが軒丸瓦として一部使用されている。沖縄本島軒丸瓦文様の第Ⅸ文様系に類するもので、新旧を窺うことができるものである（註28）。

8) 池間島ナナムイ御嶽

池間島の南端部、現在の池間集落よりやや離れた雑木林の中に御嶽は所在する。池間では御嶽のことをムイと称し、ナナムイは七神を祭ること由来するといわれる。祭祀場には瓦葺きの拝屋があった（註 29)。第 2 図 3 は当地からの表面採集資料である（註 30)。明朝系軒丸瓦で酸化焼成炎の赤色瓦で、丸瓦部分が欠落している。瓦当上縁部は瓦当裏の剥離状況から丸瓦の端部で形づくる製法であることを示す。また、瓦当裏中央は凸レンズ状に盛り上がり、顎部分に漸次薄く整形する。瓦当径は 15.6 cmである。文様は住屋遺跡と同種のものである。

以上、7 遺跡と出土瓦を概観したが、時代はグスク時代から近代・現代と幅広い。遺跡の性格をみるとグスク時代(中世)は集落跡である。その後の琉球王国時代(近世)は蔵元(役所)、村番所（ブンミャー)、御嶽（拝所)などである。特に琉球王国時代以降は平良市内が政治的な拠点になり、当然関連の役所や信仰、祭祀の施設なども集中するところである。明らかに宮古諸島地域における権力拠点と瓦葺建物とが大きく重なっている。

表 3　宮古諸島における遺跡出土の瓦分類表

遺跡＼分類	高麗系瓦		明朝系瓦						近代大和瓦		島産大和系瓦			
	灰色		灰色	赤色					黒色		赤色			
	軒丸瓦	平瓦	平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦 無文	平瓦 a類	棟瓦	桟瓦	軒丸瓦	軒平瓦	平瓦 a類	平瓦 b類
上比屋山遺跡	●	●												
砂川元島遺跡				●	●	●	●	●						
上ヌ頂遺跡				●	●									
根間・西里遺跡										●				
尻並遺跡					●	●	●	●			●	●	●	
住屋遺跡			●	●	●	●	●	●	●	●			●	●
漲水御嶽				●	●	●	●							
ナナムイ御嶽				●										

4、宮古諸島における瓦の特徴と推移

前節で出土遺跡と出土瓦について概観したが、ここで造瓦技術別に整理し、型式学的変遷について検討する。分析の結果、瓦の種類は高麗系瓦、近世から近代に属する明朝系瓦、近・現代に属する大和瓦、また、その影響を受けて生産された島産の大和系瓦の 4 種類である。以下に型式学的特徴を整理する。

1) 瓦の特徴

高麗系瓦

高麗系瓦は前述したとおり現時点で、宮古諸島における存在は上比屋山遺跡のみである。数量から明らかに建物に使用されたものではない。伝製品的性格が強く、資料採集にいたる真相を明確にする手だてがない現状としては、当資料の取り扱いについては慎重を期したい。

明朝系瓦

現在報告されている資料中で、最も多く得られている瓦である。焼成別に灰色瓦と赤色瓦の２種類に分けられる。ただし量的には前者は微量で、後者が圧倒的に多い。

①灰色瓦

還元炎焼成の灰色瓦で、住屋遺跡のみから微量出土している。なお、同遺跡からは赤色瓦も伴出しているが、新旧を明らかにするには至っていない。八重山諸島の瓦に比較すると胎土には石英砂粒の混入がなく、精錬されている。これは後述の赤色瓦も同様。灰色瓦の種類は平瓦のみので、焼成が弱いためか器面の風化が進でいる。現在平瓦以外の資料はみられず、使用状況についてもは不明である。概知の焼成技術の編年に基づくと古式の瓦となる。

②赤色瓦

上記したように明朝系瓦の主体をなす製品である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の４種類が認められる。

②-1　**軒丸瓦**

軒丸瓦の瓦当文様は側視形の花文様である。この文様は明らかに沖縄島の軒丸瓦の文様を系譜にもつ（註 31)。しかし、子細にみると宮古における独自の変化として認識できるものである。まず花弁の簡略表現と花芯部が上下のいずれからの視点でも花の形を呈している。軒丸瓦の場合は側視形の花文様で、沖縄のものに比較すると若干の変化がみられる。これは現時点で宮古諸島の軒丸の初期タイプとして位置づけられる。

②-2　**軒平瓦**

軒平瓦は瓦当が滴水瓦である。この文様は明らかに那覇壷屋の系譜を有するもので、文様は一種類である（註 32)。軒丸瓦に比べて、軒平瓦当文様には大きな変化はみられず、沖縄の文様をほぼ忠実に製作したものである。いずれにしても、宮古諸島の軒平瓦の初期タイプと考える。

②-3　**丸瓦**

模骨巻成形で、側面には分割痕が残される。軒瓦の場合はその限りではなく、面取り整形をするようになる。

②-4　**平瓦**

平瓦は凸面に篦よる波状の沈線文を描く。沖縄島の明朝系瓦にも 1~2 本の沈線が囲繞する事例もみられるが、宮古島のように恣意的な文様としては存在しない。宮古式土器の肩部の文様と対比する理解もあるが、いずれにしても宮古独自性として特筆される。機能としては屋根葺き段階において、重ねによるズレ落ち防止を意図するものである。当該波状文様も波紋が大きく展開するもの、細かく上下に刻むものと、バリエイションが認められる。また、波文は一条から三条の沈線を一組として数条施す。施文部位では広端側、中筒部分、狭端側にみられ、資料不足のため現時点では特定箇所を窺うことができない。

近代大和瓦

近代大和瓦は瓦当面が無紋の軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、桟瓦、棟瓦の４形式が認められる。平瓦については近代大和瓦にみられる櫛掻きで線描したものが凸面側に施される。なお、生産地と関連する刑務所生産もしくは発注を示す刻印のある桟瓦や、「寿」を記した棟瓦が出土している点で注目される。

島産の大和系瓦

その技術の影響が島瓦生産に影響を与えたものとして島産の赤色大和瓦がある。いわゆる第二の大和系瓦（註 33）の存在である。基本的な技術は明朝系瓦（島瓦）で、概観を近代和瓦様に模して造ったものである。形態や瓦当面の仕様が無紋の軒丸、軒平瓦と平瓦が出土している。平瓦の凸面には文様に似た２種類の櫛掻きを行っている。ａ類が横位の囲繞するもの。ｂ類が横位の線に波状の線が組み合わせたものである。ａ類は本土瓦にみられるものを模しているが、ｂ類は島瓦の波状線文を発想した組み合わせである。

2) 宮古諸島における瓦の推移

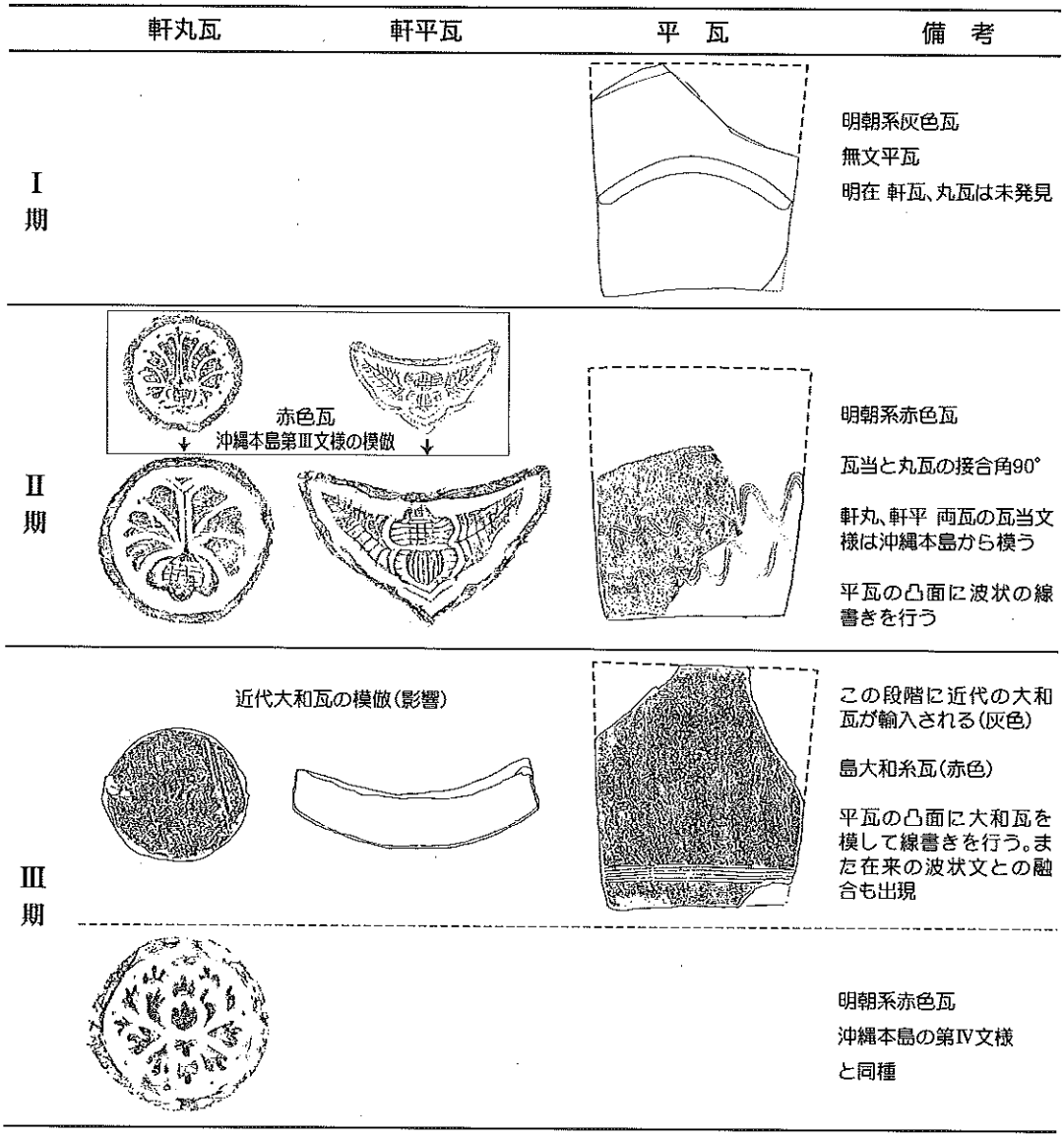
前節の資料を、宮古諸島の瓦史として編年すると三期に区分して考えることができる。なお、本稿では明朝式瓦を中心とし、高麗系瓦については今後の検証を待って取り扱うこととした。

Ⅰ期は灰色系瓦の時期である。那覇から直接移送されたものとものと思われる。記録にみる祥雲寺の屋根瓦も同瓦で築かれたものと考えられる。考古資料としては現在平瓦のみ確認されている。

Ⅱ期は酸化焼成炎による明朝系赤色瓦を自ら生産する時期である。種類は軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦の種類である。軒丸瓦及び軒平瓦とも、瓦当文様は一種類のみ伝播している。とくに軒丸瓦の瓦当文様は、珠文の欠落、花心部分の表現等に変容が認められる。また、平瓦は基本的な整形技法に変化はないものの、凸面側に篦ガキで波状沈線文様を描く。この点は沖縄本島には様式化したものはなく、軒丸瓦と同じく独自性として認識される。機能としては屋根葺き時の、重ね葺きにおける滑り留めの効果を期待してのものと考えられる。

Ⅲ期は日本本土の近代瓦の導入期とする。当大和瓦の使用と、明朝系造瓦技術で大和瓦を模した島大和瓦が生産される。瓦当面が無文の軒丸、軒平瓦があり、平瓦の凸面においても大和瓦にみる線掻きを模した線掻きが施される。手法は近代大和瓦の直線構成と、Ⅱ期から存在する波状文様を組み合わせたものがある。いずれにしても櫛幅はⅡ期のものに比較すると 1.1 ～ 1.3 cmとほぼ一定している。なお、大和瓦の導入及び模した島瓦が生産されるとともに、沖縄本島から第Ⅸ文様系の軒丸瓦の導入されている。以上、上記の瓦の特徴からⅠ期は近世の 17 世紀前半から 17 世紀末まで、Ⅱ期は 18 世紀から 19 後半、Ⅲ期は 19 末から大戦前までとの試案をもつ。

第７図　宮古諸島の瓦編年



5、宮古諸島の生産窯跡

屋瓦の存在は窯とも大きく関連しているため、ここで生産遺跡の調査研究の状況をみておきたい。窯跡の調査については、1995 年沖縄県教育委員会の発刊による生産遺跡分布調査によれば、宮古平良市４件、池間島１件、下地町１件の合計７件の窯跡が示されている（第８図）(註 34)。ただ、その所在については、殆どが聞取り調査によるもので、正確な位置確認が行われていない。また、操業期間は上限は明らかではないが、下限は近代までと新しい。今後遺物、遺構などを通して位置や操業年代を明らかする作業が残されている。当報告書の位置図には名称がないため、本稿では地区名を冠して以下に示す。

1．成川地区古窯跡…平良市成川地区内に所在する。戦前の操業で、現在は原野化している。

2．大浦地区古窯跡…平良市大浦地区に位置する。戦前の操業で窯の存在を伝える。土地改良時において遺物の散在確認されている。

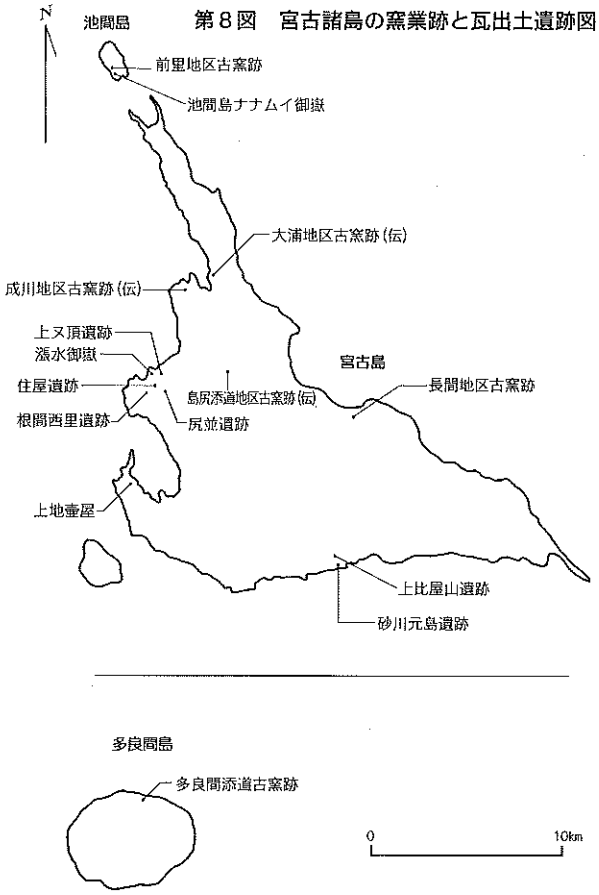
3．平良市添道地区古窯跡…平良市添道地区所在する。伝聞では戦前操業していたと伝える。

4．前里地区古窯跡…平良市池間島所在する。大正時期に操業し、煉瓦類が確認された。

5．長間地区古窯跡…城辺町長間地区所在する。

6．上地壷屋…下地町所在する。

7．多良間添道地区古窯跡…多良間島添道所在。現在サトウキビ畑となっている。



第８図　宮古諸島の窯業跡と瓦出土遺跡図

以上７件の窯跡を挙げたが、その他記録に平良頭職宮金氏寛富が焼成したとされる大野山林が気にかかる。地積図において大野山林地区には「瓦原」の畑名が確認され、当該地が地理的に湧水や溜ま水の環境（註 35）であることから、原料の粘土や薪の採捕地という点で条件がそろい、窯跡の存在が予想される。このようなことから生産遺跡の調査研究は今後に委ねる部分も多い。現時点における生産遺跡の分布は、殆どが宮古島の西側地域に見られる点では特徴として押さえらる。これは瓦を需要する平良市地域との関係を反映しているものと思われる。

6、近世・近代の瓦葺建物

つぎに、消費遺跡における瓦の使用状況を見ていきたい。ところが、残念ながら同諸島には戦前の瓦葺建物やそれを記録に留めたものが残っていない。そこで宮古の古建築物を写した絵画資料から迫ってみた。ただし、当絵画は写生ではなく、一定の時間を経た後に描かれた回想画という特徴をもつ。したがって伝聞資料の一つとして評価されるが、ここで十分に弱点を認識しつつ見てみたい（写真 1、2)。

同絵画は在地出身の画家、宮原昌茂氏によるもので、明治末頃の平良市内の風景画である（註 36)。一つは鳥瞰的な構図で、蔵元、張水御嶽、観音堂、権現堂、祥雲寺などが描かれている。二つ目は蔵元のみを正面から捉え、櫓門を力強くみせた絵である。これら絵画をもとに平面的に模式化したのが第９図である。蔵元は屋敷全体の平面形がほぼ四方

写真１　蔵元とその周辺絵（宮原昌茂氏絵）

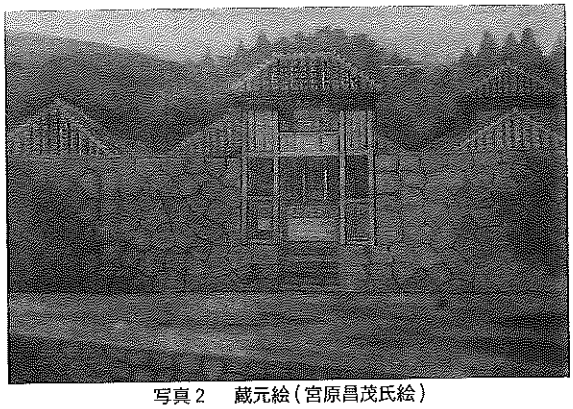
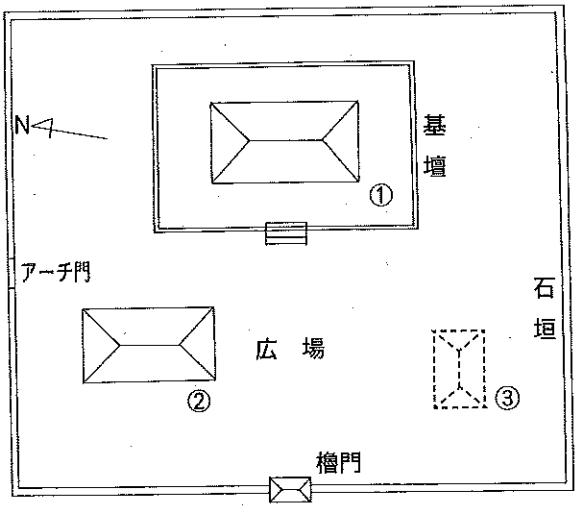


写真２　蔵元絵（宮原昌茂氏絵）



第９図 宮古蔵元平面模式図（参考資料：宮原昌茂氏 絵）
平良市総合博物館蔵

で、高い石垣が囲繞し、門は海側に向かい、赤瓦葺の櫓を築いている。この門の形態は八重山蔵元にも類似し、同様の造営方式で築造されたことを窺わせる。なお門下には４段の階段が描かれ、屋敷内の標高が道よりは高いことがみてとれる。また、屋敷内の門側は広場となり、その前に基壇を有する主屋①が配されている。絵では一階建の屋根が葺かれるが、文献記録では２階建と記され、描写上の表現的問題とその後の修改築も考慮される。また、主屋に向かって左手前にも葛石が巡る瓦葺き建物②がみられる。しかし、この点については２枚の絵で表現が異り、一つは軸線が主屋に対して平行した配置で、他方のものでは逆の垂直方向にある。記憶の正確度の問題と視覚的な絵画技法が表れているものと思われる。

また、主屋に向かって右側にも建物③が存在する。なお、同氏は当主屋右側建物について、距離測定基標を保管する小規模の建物であると説明しているが、絵画では二階建様の建物で表現され、証言に違いが認められる。形態についても検証を必要とするが、一つの建物が存在している点では一致している。そしてこれら建物はいずれも寄棟屋根で、本瓦葺の漆喰使用である。また、丸・平両瓦のみ赤瓦で、軒瓦がみられない点も注目しておきたい。以上、絵画から明治期の代表的瓦葺建物の蔵元をみてきたが、同建物の配置や基礎構造、屋瓦については今後の発掘調査で検証されるものと思われる。

第４表　宮古諸島の歴史的建物と屋瓦の推移

時代	近世						近代	現代
	1600		1700		1800		1900	
事項	1611 年	1685 年 蔵元瓦葺	1682 年 瓦屋統合	1740年 寛富瓦製作	1771年 明和大津波		1889 年 瓦葺制限解除	
建造物	祥雲寺 1611 年							
		蔵元 1685 年新築						
	在番仮屋 1629 年							
	16 世紀初期 漲水御嶽						取り壊し、復元	
	権現堂 1611 年							
造瓦の推移	明朝系灰色瓦							
				明朝系赤色瓦				
							近代大和瓦	
							島産大和系瓦	
土器型式	・上ヌ頂遺跡Ｂ式土器（回転板使用・肩部に平行線文と波状沈線文） ・第Ⅲ類土器（青山学院大学 1976 年）							

7、おわりに

以上、管見で瓦に関する文献記録、出土遺跡、生産遺跡、建造物についの資料集成を図り、現時点における出土瓦の特徴とその推移を考察した。ここで私見をもってまとめてみたい。

①宮古諸島における遺跡出土の瓦は、高麗系瓦、明朝系瓦、近代大和瓦、島産大和瓦の４種類である。その推移は高麗系瓦→明朝系瓦→近代大和瓦→島産大和瓦と変化する。

②ただし、グスク時代に相当する高麗系瓦については、検討のとおり出土遺跡における採集状況について記録が全く残されておらず、資料的には不安な点があり、現状では編年等の積極的な考察の使用には慎重を期したい。

③よって現時点では宮古諸島における瓦の使用上限は、1611 年の宮古祥雲寺の瓦葺き建立であろう。おそらく当該瓦は沖縄本島産の明朝系灰色瓦を直移入したもので、宮古島独自の生産は 1728 年の宮金氏寛富による大野山での焼成を開始として理解される。考古学的には砂川元島の発掘例をして 1771 年までさかのぼることができる。

④宮古諸島の瓦生産は八重山諸島に比すると約 30 年遅く、炻器質の陶器類も生産されるには至ってない。この背景には生産地（沖縄本島）が近くにあり、使用場所が極めて限定的であったこと、さらに燃料や労働力の安定的確保の困難さがあったと推定される。

⑤宮古諸島における初期の造瓦技術は、沖縄本島の明朝系造瓦技法による酸化炎焼成の赤色瓦である。考古学資料としての瓦の種類は軒丸瓦、軒平瓦（滴水瓦）、丸瓦、平瓦の４種類である。

⑥造瓦技術は、文様意匠に僅かながら宮古諸島の特性が認められる。第７図に編年試案を提示した。

ｉ、軒丸瓦及び軒平瓦は一様式の文様のみが伝播し、ことに軒丸瓦の側視形の花文様に花弁の簡略と花芯部に独自の表現が加わる。

ii、平瓦の凸面はナデ整形がなされ、線描で波状沈線文様を描く。
iii、軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合角度が約 90° に接合される。
iv、軒丸瓦の瓦当が薄手と厚手がある。整形からみると厚手が丁寧なものが多く、後出ではないか。
v、軒平瓦の文様は本島とほとんど同じ。両脇の葉文に施される葉脈のはみだしがあさえられている。

⑦近代大和瓦は日本本土の技術で生産された燻し瓦である。現在は棟瓦と桟瓦の２種類であるが、種類は今後増加するものと思われる。産地については、「沖縄監獄製」「寿」のスタンプが確認され、沖縄で本土技術そのもので生産された可能性もあるが、首里城跡出土の類似資料については大阪産であることが判明しており、この点も含めると内容は単純ではなく、今後引き続き検討を要する。

⑧前⑥の影響を受けた島産大和瓦が存在する。軒丸、軒平、平瓦の３種類が報告されているが、丸瓦も今後出土をみるものと考えられる。ことに平瓦について、近代大和瓦にみる櫛掻きと明朝系瓦の篦沈線が融合した櫛掻もおこなわれている。

⑨窯跡について現時点で詳細には明ではないが、その分布は宮古島の西側地域に偏在し、瓦の消費地である平良市地域との供給事情を示唆している。また、城辺町砂川における出土例は島内各地に配された村番所（ブンミャー）とのかかわりが推定される。

⑩蔵元、在番仮屋など初期の建物を瓦葺にしたのは、その建物が往時の権力拠点を示す戦略的な効果をねらったもので、時代の降りた明治期の絵画からは、石垣や門、建物などから権威付けの充実が窺い知れる。

⑪さらに、瓦葺建物は地方行政の拠点整備を意図したものであり、蔵元を含めた、張水御嶽、観音堂、権現堂、祥雲寺など配する点は、首里王都をモデルとして、近くは八重山蔵元等にも類似し、計画的な中央集権都市の整備がはかられていたことがわかる。

謝　辞

調査研究に際し、砂川玄正氏（平良市総合博物館）、小禄裕子氏（平良市総合博物館）、砂辺和正氏（平良市教育委員会）から多大な教示と便宜をいただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

註 1.　稲村賢敷『宮古島庶民史』 331 頁　1972 年　三一書房
註 2.　慶世村恒任『宮古史伝』復刻版　196 頁　1976 年 城野印刷
註 3.　もと海路鎮守のために、波上山権現を勧請したが、1611 年薩州の検使の一行があたらため寺院を経営した。『御嶽由来記』
註 4.　砂川元島遺跡調査団『沖縄・宮古島砂川元島遺跡発掘調査概報』1975 年
註 5.　城辺町教育委員会『砂川元島一個人の土地改良に係る緊急発掘調査一』1989 年
註 6.　関口広次「沖縄に於ける造瓦技術の変遷とその間の事情一勝連城本丸跡出土古瓦を中心として一」『考古学雑誌』第 62 巻　第 3 号 1976 年
註 7.　沖縄タイムス「タイ製土器宮古で初出土」2000 年 3 月 12 日　朝刊

註８．　沖縄県立埋蔵文化財センター『尻並遺跡ー那覇市地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査ー』　2003 年

註９．　平良市宮古総合博物館蔵資料。

註 10.　註４、５に同じ。

註 11.　友寄英一郎・嵩元政秀「上ヌ頂（ウイヌツズ）遺跡調査概報」『琉大史学』第４号 1973 年

註 12.　註７に同じ。

註 13.　註８に同じ。

註 14.　平良市教育委員会『住屋遺跡（Ｉ）ー庁舎建設に伴う緊急発掘調査報告ー』1999 年

註 15.　現在の御嶽に葺かれている屋瓦を観察した。

註 16.　同御嶽の表面採集資料である。

註 17.　上原静「首里城跡の高麗系瓦と大和系瓦 ー西のアザナ地区の資料ー」『沖縄県教育庁文化課紀要』第 12 号 1996 年

註 18.　沖縄県立博物館所蔵。浦添城跡北側崖の採石工事部分から採集された瓦。

註 19.　稲村賢敷『琉球諸島における倭寇遺跡の研究』1975 年

註 20.　註４、５に同じ。

註 21.　上原静「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第 14 号　沖縄考古学会　1994 年

註 22.　註 11 に同じ。

註 23.　註８に同じ。

註 24.　註７に同じ。

註 25.　註 14 に同じ。

註 26.　平良市教育委員会所蔵。発掘調査により大量に出土しているが現代遺物として扱われ、1999 年刊行の調査報告書には記載されていない。

註 27.　「漲水御嶽」『沖縄県の地名』　平凡社　2002 年

註 28.　註 21 に同じ。

註 29.　「池間の御嶽」『平良市史』　18 頁 1979 年

註 30.　民俗研究者の平敷玲治先生による表面採集資料である。

註 31.　註 21 に同じ。

註 32.　註 21 に同じ。

註 33.　上原静「第二の大和系瓦」『読谷村歴史民俗資料館紀要』　第 23 号　1999 年

註 34.　沖縄県教育委員会『生産遺跡分布調査（1)』1995 年

註 35.　崎浜靖「地積資料を利用した歴史空間の復元作業（2）ーマラリヤ有病地の地理的性格」『南島文化』第 25 号 2003 年

註 36.　蔵元は漲水御嶽の東北方に所在した。創建は仲宗根豊見親時代の 16 世紀初期。大正 10 年の漲水港第二次築港に際して取り壊された。同絵画は平良市総合博物館蔵。画家の宮原政茂氏は 1895 年２月生まれで、平良市下里の出身である。少年時代は平良小学校に通い、海辺に面した蔵元跡を中心とする観音堂や権現堂付近で遊びに興じた。当地域は当時の少年たちの格好の遊び場であった。さらに首里の師範学校に進学したあとも、長期休暇のつど埠頭に接した蔵元跡を見ながら往来した。参考文献　仲宗根將二「宮古諸島の道」『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅷ一宮古諸島の道一』沖縄県教育委員会　1991 年